

正確な診断と早期治療を目指して

Aiming at Correct Diagnosis and Early Treatment



吉田 熙宣
Hironobu Yoshida

情報通信関連技術の発展を背景に、ここ数年の医用機器のデジタル化、システム化の進展は著しいものがあります。その結果、微細病変を診断するだけでなく、デジタル処理された画像監視下で治療まで進める IVR (Inter-Ventional Radiology) のような手技が出現してきました。また、形態を主とする診断から機能の変化、動きの異常、血流の診断など、より広範な早期の診断が可能になってきました。さらに、医用画像を相互通信するための通信プロトコルが国際規格として決められマルチベンダによるネットワークシステム化が可能になりつつあります。

一方、日米欧諸国では、21世紀初頭にかけての重要課題として医療費抑制策 (Managed Care) に取り組み始めています。わが国で言えば、年率数%の伸張率で今や年間 27 兆円にのぼる医業支出を、医療の質を向上させながら抑さえる施策が展開されていくことになります。米国ではすでに病院のグループ化が進行し、少ない人件費で最大の経営効率を上げる努力が始まっています。また、治療も病院滞在期間を短縮するため、より侵襲の少ない治療 (MIT: Minimally Invasive Treatment) の開発に注目が集まっています。このような社会背景の変化に伴い、病院内だけでなく広く地域全体にわたった医療情報のネットワークシステム化を視野に入れ、画像通信保管システムの実用化、あるいは病院情報システムとの統合化などを推進していかなければなりません。

今後の技術開発の基本スタンスとして、①画像診断機器の役割は大きく、より高分解能で、より早期に異常が検出できる技術開発を推進する、② MIT を基本コンセプトとする治療システムの開発を推進する、③医療情報のネットワークシステム化などを通して、医療情報統合化のための技術開発を推進し、効率のよい医療環境を実現する、④人に優しく安全な医用機器が世界的に求められており、世界各国が策定している法規格を遵守し、より安全で品質の高い“もの作り”をさらに追求していくこと、を念頭においています。

約 60 億人の世界人口のうち最先端医療の恩恵を受けているのは 1/8 程度であり、残る 7/8 の人々への普及が今後の課題です。当社は、“真に医療に役だつ技術開発”を基本理念とし、市場が求める技術の開発を通して社会に貢献していく所存です。